

## 首つぎ地蔵・・・



「派遣切り」という嫌な言葉が世間を席卷しています。そこで、今回は中村南三丁目の「首つぎ地蔵」をご紹介します。

中村橋から中杉通りを南下し、豊中通りを越えた辺りに八幡神社があります。

八幡神社は旧中村の村社で、祭神は応神天皇です。『新編武蔵風土記稿』（文化文政期に編纂された武蔵国地誌）には「村ノ鎮守ナリ南蔵院持」とあります。南蔵院は、そこから東に3～400m行った所にあり、良弁を開祖とする真言宗の古刹です。桜の名所としても名高く、いずれ改めて本欄でご紹介したいと思っています。神仏習合が盛んに行われた江戸時代には当社の別当寺（神社に付属して置かれた寺）であったということになります。

八幡神社の神殿は社伝によると江戸時代のもと言われ、練馬区内でも屈指の古建築物です。境内本殿に向かって左手にある文化13年（1816年）奉納の御手洗石（水盤）に、卍の彫刻のあるのが目に付きます。神仏習合時代の痕跡を留める石造遺物ということになります。



この社殿裏に、境内から住宅地へと抜ける道があり、数軒の民家の前を過ぎた角に「首つぎ地蔵」のお堂が立っています。豊敷きの立派なお堂で、集会所として今も地域で大切にされているようです。地蔵の背は1mくらいで、首は赤い帽子と前垂れに覆われていました。さて、肝心の「首つぎ」の所以についてですが、南蔵院所蔵の「首接地蔵縁起絵巻」によれば、その概要は次の通りです。

話は、昭和7年11月5日、文京区大塚にある護国寺で行われる暁天読誦会から始まります。そこに集った信者の夢物語として、中村の首なし地蔵の話が紹介されます。

その話を受け、居合わせた美術学校校長の妻から、震災直後に知人から持ち込まれたという地蔵の首が自宅の庭石の上に飾ってあるので、接いでみてはどうかとの提案がなされます。

折しも護国寺に滞在中だった豊山派総本山長谷寺の大僧正にそのことを相談すると、「素晴らしいご縁だからすぐにでも接がれるとよろしい。」と賛成されます。

こうして早速、首と胴は見事に接がれることとなり、護国寺と南蔵院の住職2人によって開眼供養がとり行われたのが同月29日だったという次第です。

当時は大不況の時代だったこともあり、この種の評判はすぐに広まったようです。噂が噂を呼び、「首がつながる」「首切りをまぬがれる」ということから、首つぎ地蔵への参拝は一躍大ブームになったとか。では、昨今の世相を反映して、リストラや派遣切り除けにと参拝者が増えているのかどうか、それについては調査中ということとで…。